

## 政治と経済とエミリー・ディキンソン

江田 孝 臣

### 1. 序

Betsy Erkkila は、1989年の画期的な研究書 *Whitman: The Political Poet* (New York: Oxford UP, 1989) において、特に第二次大戦後の Whitman 研究を歴史主義の立場から批判して、次のように述べている――

ウォルター・ホイットマンは、1855年の『草の葉』において、政治ジャーナリストからアメリカを歌う詩人へと変貌を遂げたが、この変貌を説明しようとする批評家たちは、政治家ホイットマンと詩人ホイットマンの分裂に当惑してきた。しかし、この分裂は、批評家自身が作り出したものだった。彼らは、政治と芸術の分離を主張するモダニストや新批評家の影響下で、ホイットマンの詩を政治的な一回性の作品という非難から救い出し、普遍的な芸術性を持つものとしたがったのだ。とりわけ、ホイットマンの非政治的源泉に重きを置く過去40年間の批評的研究は、彼の芸術の形式的、神秘主義的、そして心理的次元を強調してきたし、いまでも大半の研究がエマソンと超絶主義の影響を論じている。芸術の純粹性というロマン主義的、モダニズム的な考えと、ホイットマン初期の政治への関与という事実を和解させることができない批評家たちは、詩人ホイットマンの誕生を説明するために、込み入った、そして時に矛盾する数々の説を提出してきた。エマソンやジョルジュ・サンドや他の作家を読んだことが決定的だったと主張する者もあれば、ニューオーリンズでのオクトルーンとの恋愛、あるいは神秘体験、あるいはもっと近年では、エディプス的あるいは別の種類の性的危機が決定的だったと主張する者もいる。しかしながら、ホイットマンの民主主義讃歌の根底にある、どう見ても政治的な情熱と闘争を十分に強調した批評家は少ないし、それを厳密に吟味しようとした批評家は皆無である。(Erkkila, *Whitman* 6)

Whitman が、政治ジャーナリストから詩人に転身したことは事実だが、それは政治と訣別したことを意味しない。政治と断絶して詩人となったというのは、冷戦期のイデオロギー的要請によって、フォーマリスト批評が作り出したフィクションであると Erkkila は断言する。現実の政治に

は幻滅したが、詩人となった後も政治的であることを Whitman はけっしてやめなかったというのが、Erkkila の書名 *Whitman: The Political Poet* に込められた意味である。Whitman が現実の政治に失望した理由についての Erkkila の説明は、なぜ文学に向ったかを説明する、従来の批評家たちの「込み入った説」とは違って、じつに明快である――

1840年代後半、ジェファソンの諸理念と民主党のそれとがもはや一致していないと見てとったホイットマンは、党と訣別し、いまだアメリカに生きる遺産であるジェファソンの信条と建国者たちの聖火を復権させようと、彼独自のキャンペーンを始めた。(Erkkila, *Whitman* 20)

1810年代半ばから1860年代にかけて、産業と経済の革命がアメリカ合衆国を産業主義と市場主義の社会に転換すると共に、Jacksonian Democracy 以降、建国の父たちの政治理念は大きな変質をこうむった。Whitman は、Jefferson や建国の父たちの理念を、詩において表現するという「独自のキャンペーン」に切り替えたに過ぎない、と Erkkila は主張する。

Erkkila は、この1989年の Whitman 研究書においては、Emily Dickinson については2箇所ですら短く言及しているだけである (Erkkila, *Whitman* 175, 258)。そのうちの2番目の言及では、“I’m ceded - I’ve stopped being Theirs -” (Fr 353 / J 508) の言語を“political”と形容してはいるものの、この Whitman 研究書のアプローチを応用して、Dickinson を徹底して「政治的に」に読み得るとは、この時点では、おそらく誰も予想しなかっただろう。この時点までの Dickinson 研究も、Erkkila が批判する Whitman 研究と同様、フォーマリスト批評の影響のもと、大方は没歴史的な (ahistorical) ものにとどまり続けていた。

Erkkila は、1992年刊の *The Wicked Sisters: Women Poets, Literary History & Discord* (New York: Oxford UP, 1992) の第2章と第3章において、Dickinson と本格的に取り組んでいる。第2章“Emily Dickinson and the Wicked Sisters”では、Dickinson が、手紙と詩のやりとりによってつくられた女友達の世界に生きた詩人であり、なかでも重要だったのが、後に兄 Austin の妻となる Susan Gilbert との精神的同性愛の関係であったと Erkkila は論じている。Dickinson はこの「邪悪な姉妹たち」がつくる世界を、神と男が支配するキリスト教的男性優位社会と区別し、自ら「悪魔的な」と称していたときわめて挑発的な議論を展開している。この章の最後の節“Placing Dickinson in History”では、同年発表の論文“Emily Dickinson and Class” (*American Literary History* 4 [1992], 1-27) の一部を利用しており、唯物論的フェミニストの立場から、Dickinson による女だけの世界の探求が、当時の民主主義、産業革命、経済革命等の進展と深く関係していたとする――

しかし、自らを女友達の聖なる小集団の内部に封じたいというディキンソンの強い願望は、

成人し、結婚し、子どもを産むという男たちが作った筋書きが持つプレッシャーに抵抗する手段だっただけではない。ディキンソンの女友達の共同体は、また、民主主義的、商業主義的、科学技術主義的、国家主義的変容を推進する諸勢力に抵抗する手段でもあった。当時、保守的なホイッグ党の地方郷士の娘だったディキンソン自身の階級上の特権は、四方を敵に包囲されていた。(The Wicked Sisters 45)

第3章“Dickinson, Women Writers, and the Market Place”の第1節も“Emily Dickinson and Class”と重複しており、Dickinsonが詩の出版を拒否したのは、当時の出版界の民主化、商業化、女性化（女性職業作家の進出）を嫌ったからだとし（56-57）、第2節以降では、Dickinsonが商業主義に媚びるアメリカの女性作家よりも、Brontë姉妹、Elizabeth Barrett Browning、George Eliotらイギリスの女性作家たちの方に共感を持っていたことを例証している。

2004年刊のVivian R. Pollak編の*A Historical Guide to Emily Dickinson* (New York: Oxford UP, 2004)は、“Guide”と称してはいるが、単なる入門書に留まらず、1998年刊のGudrun Grabher他編の*The Emily Dickinson Handbook* (Amherst: U of Massachusetts P, 1998)およびMartha Nell SmithとMary Loeffelholzが編纂した2008年刊の*A Companion to Emily Dickinson* (Malden, MA: Blackwell, 2008)と並ぶ重要な論文集だが、ここにErkkilaは、前述の1992年刊の2著におけるDickinson論を発展させた“Dickinson and the Art of Politics”を発表している。*Whitman: The Political Poet*が従来 of Whitman像を大きく塗り替えたように、このDickinson論もまた、同様の歴史主義的観点から、Dickinson像の大きな修正を促している。このなかでErkkilaは、Dickinsonが、保守的なWhig党员であった父親と共に、古いエリート主義的なFederalistの理念（George Washingtonへの尊崇を伴う）を信奉し続けたとしている——「ディキンソンは、本質的に保守的な伝統の、すなわち、ジェファソンが大統領に選出された1800年の民主主義〈革命〉で支持を失った後期フェデラリスト的な精神と感性の、機知に富む雄弁な代弁者だった…」(*Historical Guide* 137)。また、Erkkilaは、DickinsonをBlackmur的な“private poet”とする見方に異議を唱えて、Habermas的な意味での一種の“public sphere”において人並み以上に活躍した人物であると主張すると同時に、詩の出版を拒んだことについては、「彼女の出版拒絶は、私的な行為ではなかった。それは、商業化され、民主化され、なおかつ、ますます雑多となり大衆化される全国市場に対する、社会的階級的な抵抗行為であった」(*Historical Guide* 150)としている。Erkkilaの論文はいずれも、Kate Milletの*Sexual Politics*以来、階級の壁を軽視しがちなアメリカのRadical Feminismへの異議申し立てであり、性差の壁より階級の壁の方が高いことを説いたSimone de Beauvoirの立場への回帰を主張している。

Whitmanは民主党の原点であるJeffersonの諸理念への回帰を志向し、一方で、Dickinsonは、「1800年の〈革命〉」以前の、Washington、John Adams政権下のFederalistの諸理念に忠

実であり続けた。その出身階級の違いからすれば、当然といえば当然の帰結ではあるが、二人の詩人を論じる上で重要なのは、ほぼ同時代人と言える彼らの後向きの姿勢が、合衆国の発展期すなわち産業主義と市場経済が進展した時期に形成されたということである。ことに、Dickinson 批評にとって、この歴史主義的な読みの可能性は、Whitman 批評にとって以上に大きい。というのも、確かに Erkkila が嘆いているように、*Leaves of Grass* の背後にある政治的情熱を吟味した批評家は皆無だったにせよ、同時代の現実の政治と Whitman との関係については多くが語られてきた一方で、Dickinson 批評においては、文化史的な作品研究は試みられても、彼女の作品を政治的、経済的な文脈において読む営みは、ほとんどなされてこなかったからだ。

以下の章では、Erkkila が歴史主義的な視座から Dickinson の詩作品を具体的にどのように読み直しているかを紹介しつつ、Erkkila がおそらくは気づいているが言及していない読解の可能性を、そして、おそらく彼女の念頭にはないだろう若干の読解の可能性を追求してみたい。

## 2. 政治と Dickinson

ここで最初に取り上げるのは、Dickinson のどんなアンソロジーにも必ず収録され、英語圏の国々であれば、小学校の教材としても使えそうな、一見、たわいもなくイノセントに見える作品である――

I'm Nobody! Who are you?	わたしは誰でもない人！あなたは？
Are you - Nobody - too?	あなたも誰でもない人なの？
Then there's a pair of us!	それならわたしたちは似たもの同士！
Don't tell! they'd banish us - you know!	言っちゃダメよ！追放されるから、ねっ！
How dreary - to be - Somebody!	ひとかどの人なんて、なんて退屈だろう！
How public - like a Frog -	なんてパブリックだろう、カエルみたいに
To tell your name - the livelong June -	六月の間中、ほめそやしてくれる
To an admiring Bog!	沼に向って、自分の名前を叫ぶなんて！

(Fr 260 / J 288)

Erkkila は、この詩を「肩書きと地位の政治学」をパロディー化したものとして、ジェンダーと階級の観点から、次のように分析してみせる――

「誰でもない人」たる詩人が確たるアイデンティティーを欠いていることは、女の人生を定義し限定している社会的権威の諸構造からの自由を表わしている。しかし、この一見民主主

義的な「誰でもない人」の仮面の裏には、「ほめそやしてくれる沼」として形象化される民主主義的大衆という悪魔化された集団のなかで、あるいはそれを通じて定義されることを拒否するひとりの貴族が潜んでいる。(The Wicked Sisters 50-51)

連邦議員をも務めた町の名士である父親の経済的庇護下でありながらも、父権的な権威からの自由を渴望し、また産業と資本の発達に伴う民主主義の急速な進展という歴史的潮流の中にあって、悪魔的な「大衆」の登場に、おそらくは父親と共に、脅威と怖れを感じている Dickinson 像が浮き上がってくる。読者の眼には、カエルという無害な小動物とペアで登場するために無垢なものと映る「沼」(“bog”)が、Dickinson の詩の語彙のなかでは、政治的意味を帯びる場合があることを、Erkkila は、“Dickinson and the Art of Politics”において以下のように例証している (Historical Guide 137-38)。

1862年、父 Edward の法律事務所で共同経営者として働きながら後継者の道を歩んでいた Austin は、Dickinson 家の保守的な Whig 主義と敵対していた地元の法律家で政治的指導者だった Ithamar Francis Conkey と何らかの形で衝突した。そのことを父から聞いた Dickinson は、兄に一篇の即興詩を送り、「お父さんが言ってたけど、フランク・コンキーが兄さんを怒らせたんだってね」と書き添えた。この詩のなかで、Dickinson は、兄が侮辱を受けたことを、「ごぼう」(“Burdock”)に服をひっかかれたことに、あるいは、「沼」(“Bog”)に泥をはねかけられたことに喩えて、兄を半分からかい、半分慰め、かつ、おそらくは兄の発奮を促している。Erkkila は最後の2連しか引用していないが、ここでは全3連を載せておく。Erkkila が省略した第1連冒頭の“Burdock”と、続く連の冒頭の“Bog”の音の取り合わせが、Dickinson に特徴的な滑稽味を醸し出しているからだ――

A Burdock - clawed my Gown -	ごぼうが私のガウンを引き裂いた
Not <i>Burdock's</i> - blame -	ごぼうのせいじゃなくて、
But <i>mine</i> -	ごぼうのねぐらに
Who went too near	近づき過ぎた
The Burdock's <i>Den</i> -	私が悪いのだ
A <i>Bog</i> - affronts my shoe -	沼が私の靴を辱めた
What <i>else</i> have Bogs - to do -	他に沼に何ができよう
The only trade they <i>know</i> -	連中にやれることといたら
The <i>splashing Men!</i>	人に泥をはねかけることだけ
Ah, <i>pity</i> - then!	だとしたら、何て可哀想なこと!

'Tis *Minnows can despise!*  
 The *Elephant's* - calm eyes  
 Look *further on!*

人を蔑むことができるのは雑魚だけ  
 象の穏やかな眼は  
 ずっと先を見ている

(Fr 289A / J 229)

伝記的文脈において眺めれば、父と兄がその一部をなす父権制内部における男同士の諍いに対する Dickinson の冷笑的な態度が読み取れる一方で、Dickinson は、一人称の語りを用いることによって、兄の受けた侮辱を自らのものとし、兄に同情と慰めを提供してもいる。この詩の伝記的背景は、すでに1955年の Johnson 版において明らかにされているから、この詩を糸口にした Dickinson の政治的読解の可能性は、批評家と研究者の眼前に、半世紀の間ずっと存在していたことになる。この詩の歴史的な文脈について、あらためて Erkkila はこう注釈する――

ディキンソンの詩は、ニューイングランド・ホイッグ党の古いエリート的な秩序と、19世紀を特徴づけた民主主義的、共和主義的自由主義を標榜する新興の諸勢力との間の歴史的闘争を見事に要約している。敵対勢力のリベラルな姿勢を、「近づき過ぎた」ために彼女の「ガウン」を傷つけた、かたい雑草「ごぼう」に見立てながら、ディキンソンの詩の上流階級の語り手は、コンキーの「侮辱」など軽く受け流せとオースティンに警告する。語り手が古い共和主義的な美德と原理を代表しているように見える一方で、敵対勢力は、本当の男たちの確固たる権威を汚すことしか知らない「沼」風情と見下される。大衆の不満を熱っぽく語ることしか能のない劣等な人間は「雑魚」に過ぎない。ディキンソンは、真の共和主義者は、象のように振舞うものだとこの詩を締めくくるが、これは1870年代に共和党が採用することになるシンボル・マークを、不気味なほど正確に予見している。下郎たるごぼうと沼を見下ろしながら、象たちは公道を進みながら、「ずっと先を見る」のである。(Historical Guide 137-38)

「沼」(“bog”) が政治的含意を持つことは十分に裏づけられた。ここで“I’m Nobody! Who are you?”とそれについての Erkkila の評釈に戻れば、この詩の後半の4行においては、Erkkila の洞察はもっぱらこの「ほめそやしてくれる沼」としての大衆に集中しており、カエルが何を表象しているかについては言及がない。しかしながら、上に引用した文中の「大衆の不満を熱っぽく語ることしか能のない劣等な人間は『雑魚』に過ぎない」という一文は、Erkkila が、このカエルの正体についても十分理解していたことを暗示している。ここまで言えばもうすでに明らかだろうが、Erkkila が利用していない一篇の詩を参照することで、“I’m Nobody! Who are you?”

が持つさらなる意味について考えたい。

実は、ほぼ同じ歴史的状況を題材としている以下の詩と合わせて読むとき、この“*I'm Nobody! Who are you?*”で始まる詩は、民主主義的大衆のみならず、当時の政治シーンに対する辛辣きわまりない風刺であることが分かる――

His Mansion in the Pool	池の中の屋敷を
The Frog forsakes -	そのカエルは捨て去り、
He rises on a Log	丸木によじ登って
And statements makes -	演説する。
His Auditors two Worlds	聴衆は、私を除けば
Deducting me -	ふたつの世界
The Orator of April	四月の雄弁家も
Is hoarse Today -	今日はがらがら声。
His Mittens at his Feet	両手袋を足のまえに置いて。
No Hand hath he -	彼には手はないのだ。
His eloquence a Bubble	彼の雄弁はうたかた、
As Fame should be -	名声がそうであるように。
Applaud him to discover	拍手すると、
To your chagrin	惜しいことに、
Demosthenes has vanished	デモステネスはもう
In Waters Green -	緑の水の中に姿を消している。

(Fr 1355 / J 1379)

説明するまでもないが、「ふたつの世界」すなわち池と空に向って声を嗶らして鳴くカエルは、「うたかた」の雄弁をふるう政治家を表している。したがって、“*I'm Nobody! Who are you?*”中の、「ほめそやしてくれる沼」に向って「自分の名前を叫ぶ」カエルにも、演説する政治家が含意されていることは確実である。すでにこの当時、政治がますます大衆化するなか、雄弁によって政策をアピールするのではなく、恥ずかしげもなくおのが名前を連呼する他に能のない政治家が登場していたのだろうか。ただ、その場合、聴衆を、「ほめそやしてくれる」と形容することに矛盾が感じられる。街頭演説の聴衆には支持者も反対派も無党派層も含まれていたはずだからだ。しかし、政治家が演説し、聴衆がみな「ほめそやしてくれる」状況とはいかなるものかと考えるとき思い浮かんで来るのが、例えば、今日の大統領選前に行なわれる候補者決定の党大会の、聴衆全員がサクラかとも思える、そのありようである。Dickinsonの前半生は、民主党とホイッ

グ党、そしてそれに続く民主党と共和党という二大政党による政治が定着していった時代である。全国レベルだけでなく、Amherst のような田舎町の選挙においても、今日とほぼ同じような形態の政治集会在、党ごとに開かれていただろう。

カエルが政治家であり、「ひとかどの人」(“Somebody”)であるなら、「誰でもない人」(“Nobody”)であることを望む語り手は、民主主義社会においては原理的にもっとも有用であるはずの人間像とは対照的な存在になりたがっていることになる。人とモノと情報が自由に流通し、絶えず激しい変化に晒され続ける民主的な資本主義市場経済社会においては、政治家や企業家を典型とするような、常におのれの外に関心を向け、人との付き合いを好み、社交術に長け、多くの人々と関係を結びながらモノと情報を交換し合って生きるタイプの人間が、社会にとってもっとも有用とされるだろう。これはC・G・ユングが外向型(extrovert)と呼んでいるタイプの性格であるが、Dickinsonの方はたとえば、内向型(introvert)、すなわち、心的エネルギーを外に拡散させることなく内部に蓄積し、内面に独自の世界を作り出し、この世界が乱されるのを嫌い、必死に守ろうとする、と定義される性格であることは明白である。ユングはこのふたつの性格のタイプを個人に固有のものと考えたが、ポスト構造主義的観点からは、人の成長過程で構築されるもの、したがって歴史的状況に左右されるものと考えた方が妥当である。1830年代に本格化する産業化と資本主義市場経済化が、政治家を典型とするような外向型の人々の増加を要請した。実際にそのような人々が増え、Dickinsonも身近に目撃したであろう。したがって、保守的な旧ホイッグの伝統への愛着を父や兄と共有するDickinsonの「誰でもない人」への志向は、内気な性格に基づく退行というよりは、自分の意に染まない民主主義市場経済社会が要請する「有用な人物」には、死んでもなりたくないという抵抗の表明であろう。裏返せば、Dickinsonは自分が生きる社会と時代に強い疎外感を感じていたということになるが、そう考えるときにはじめて、この詩の4行目の一見子供っぽい「言っちゃダメよ！ 追放されちゃうから、ねっ！」(“Don't tell! they'd banish us - you know!”)は、深刻な意味を帯びてくるように思われる。また、“banish us”の異文として、明らかに経済用語である“advertise”を詩人が遺していることも興味深い。なぜなら、Dickinsonにとっては、自らがあるいは自分の作品が、市場において商品として「宣伝される」ことは、まちから「追放される」ことと同様に厭うべきことであったはずだからだ。

さて、Erkkilaは、「誰でもない人」の背後にひとりの貴族がひそむことを看破したが、この貴族にとっては衆愚政治に他ならない民主主義が進展(蔓延)するなかで、「雑魚」の蔑みをもものともせず、貴族の超然さを保ち続けるために仰ぐべき手本が、「ずっと先を見ている」象の穏やかな眼であった(“The Elephant's - calm eyes / Look further on!”)。これはErkkilaが指摘していないことであるが、Dickinsonの他の作品では、先を見ることのできるこの眼は“discerning eye”と呼ばれており、やはり同様に、民主主義への不信感、あるいは貴族主義的な



矜持を伴って登場する――

Much Madness is divinest Sense -	大いなる狂気は、見る眼のある人には
To a discerning Eye -	この上もなく聖なる正気。そしてまた
Much Sense - the starkest Madness -	大いなる正気は、まったくの狂気。
'Tis the Majority	ほかの全てのことと同様、このことにおいて
In this, as all, prevail -	力をふるうのは多数決。
Assent - and you are sane -	賛成多数なら、あなたは正気
Demur - you're straightway dangerous -	反対多数なら、あなたはすぐに危険人物で
And handled with a Chain -	鎖に繋がれる。

(Fr 620 / J 435)

これまたよく知られたこの作品は、狂気と正気の定義詩とも解釈し得る一方で、民主主義の根幹である多数決の原理に真っ向から不信を突きつけた作品としても、当然ながら解し得る。なおかつ、民主主義が進展する世界のなかで、自分自身と家族の政治信条が少数派になりつつある現状への深い危惧が窺われる。1860年代に生きる Dickinson にとって、フランス革命後の恐怖政治は、それほど大昔の話ではなかった。

一方、“The Robin's my Criterion for Tune -” (Fr 256 / J 285)においては、“discerning eye”は、貴族意識を伴って登場する。この詩は全体としてはけっして政治的とは言えないので、必要な部分のみを引く――

Without the Snow's Tableau	でも、あの雪の絵模様のない冬なんて
Winter, were lie - to me -	嘘としか思えない。なぜなら、わたしは
Because I see - New Englandly -	ニューイングランド流にもものを見るから
The Queen, discerns like me -	女王だってわたしのように
Provincially -	地方的にもものを見るのだ

英国と、詩人が住むニューイングランドの季節感を対照させる一方で、女王（ヴィクトリア）のもの見方に、自分のそれを擬えることで自らの貴族性を示唆していることは明らかである。裏返せば、Dickinson にとっては、住む国の違いよりも、階級の違いの方が大きな意味を持っているようにさえ思われる。けっして、自分とヴィクトリア女王を同じレベルにおくことで、合衆国と大英帝国の国力格差の縮小を誇示していると解すべきではない。Dickinson はそのような類の愛国者ではけっしてない。

### 3. 経済と Emily Dickinson

Dickinson と出版の問題については、多くのことが語られ、論じられてきたが、ここでは、Erkkila と共に、この問題を新しい地平にのせて考察してみよう。取り上げるのは、これも出版の問題に触れる場合には、誰もが必ず用いる有名な例である——

Publication - is the Auction	出版は、人の
Of the Mind of Man -	精神の競売
Poverty - be justifying	そんな汚らわしいことをするくらいなら
For so foul a thing	貧困も、おそらく
Possibly - but We - would rather	正しいこと。われらは
From Our Garret go	われらの屋根裏部屋から
White - Unto the White Creator -	白い創造主のもとに、白いまま旅立とう
Than invest - Our Snow -	われらの雪を投資するくらいなら。
Thought belong to Him who gave it -	思想はそれを与えてくれたお方のもの
Then - to Him Who bear	それなら、思想を体現する
Its Corporeal illustration - Sell	あのお方に、高貴な
The Royal Air -	調べを、ひとまとめに
In the Parcel - Be the Merchant	売り渡すのだ。天上の恩寵の
Of the Heavenly Grace -	商人となれ
But reduce no Human Spirit	人間の魂を、価格という
To Disgrace of Price -	恥辱に貶めてはならない

(Fr 788/ J 709)

一見して、経済用語 (“Auction,” “invest,” “Sell,” “In the Parcel,” “Merchant,” “Price”) が多用されているのが目を引く。まずは Erkkila の見解を紹介するが、彼女は、*The Wicked Sisters* と “Emily Dickinson and the Art of Politics” の両者でこの詩に短く言及している。どちらもほぼ同じ内容なので前者における評釈を引く——

反奴隷制運動のレトリックと新たな人間の奴隷化である賃金労働に抗議するレトリックが交

錯するきわめて政治的な言語を配備しながら、ディキンソンは商業出版という「オークション」台に反対し、「人間の魂を／価格という恥辱に眨めてはならない」と述べる。(The Wicked Sisters 56)

賃金労働に抗議するレトリックが用いられていることは、終わりの2行“*But reduce no Human Spirit / To Disgrace of Price -*”に明白であろう。また、南部における奴隷売買が含まれているという Erkkila の見方の根拠は、“Auction”の語が、奴隷売買市場において売り物の黒人奴隷を展示するために用いられる *auction block* を想起させることである。Erkkila は、Dickinson が詩の商品化に反対するのに際して、黒人や労働の商品化に抗議するレトリックを使っていると主張している訳ではない。なぜなら、この詩においては、労働の価格(“Price”)すなわち賃金が“Disgrace”と呼ばれ、白と反対の色が“foul”であることが暗示されているからだ。この詩人は、黒人奴隷にも移民賃金労働者にもけっして共感的ではない。このあたりについて Erkkila は明らかに説明不足であり、場合によっては読者の誤解を招く。というのも、Erkkila は“Emily Dickinson and the Art of Politics”の第4節“Political Interiors”や、この論文のベースとなった挑発的な先行論文“Emily Dickinson and Class”において、Dickinson の人種主義を懸命に論証しようとしているからだ。ちなみに、“The Malay - took the Pearl” (Fr 451 / J 452) 中の人種主義に正面から向き合った Paula Bernat Bennett の2002年の論文“‘The Negro never knew’: Emily Dickinson and Racial Typology in the Nineteenth Century” (*Legacy* Vol.19, No.1 [Lincoln, NE: U of Nebraska P, 2002]) や、Dickinson 家で庭師やメイドとして雇われていた黒人やアイルランド人について調査した Aife Murray の2008年の論文“Architecture of the Unseen” (*A Companion to Emily Dickinson*) などによって、Dickinson に人種主義的側面があったことは、今日ほぼ定説化している。

したがって、この作品は、商品化されることで汚れた奴隷労働や賃金労働と同じ道を、詩に辿らせてはならないと主張していると解すべきである。これは Erkkila の解釈でもあるはずだ。そもそも Dickinson は奴隷労働や賃金労働から、詩作行為を明確に区別している。前二者が人間の産み出すものであり、繰返し再生産できるものであるのに対して、第2, 3連では、「人の精神」の所産であるはずの「思想」(“Thought”) すなわち詩が、元々は「白い創造主」のものであるとされているからだ。すなわち、Dickinson にとっては、詩は贈物 (gift) として意識されている。

近代社会は、市場における商品交換の原理と贈与交換の原理のふたつが支配する世界であり、市場主義の進展と共に、徐々に前者が後者の領域を侵食しつつあると言える。市場における、商品とこれも商品である貨幣の交換は、即時に行なわれる等価交換であり、商談成立後は、原理的

には売り手と買い手の間には、いかなる心理的つながりも残らない。それに対して、贈与は、受けた側に借りができたという心理的負担を生じさせる。受け手は、お返しの贈物すなわち反対給付を義務づけられるが、即時に行なう必要はない。多少の時間的な遅れがあってもよい。むしろ即時のお返しは礼を欠くと取られる場合もある。また、お返しの贈物は、もらったものと等価である必要はない。むしろ反対給付は等価であるかどうか相手に分からないのがよい場合も多い。もらったものより高価なお返しは、これも礼を欠くと取られかねない。市場における商品交換では、買った後に等価交換でなかったことが判明すれば、売り手にクレームをつけることも、返品することもできるが、贈与に対するお返しの場合は、たとえ贈った物と比べて著しく見劣るとしても、苦情を言うことはできない。精々、陰口をきくしかない。

文学空間は贈与の原理に支配されている。しかも、詩を詩神の贈物と見なす靈感論の観点から眺めた場合、または通時的に眺めた場合、一方通行の贈与の原理が支配する世界である。一方的な贈与が受け取った側に負わせる心理的な傷をニーチェは「贈与の一撃」と呼び、けっして返せない、すなわち反対給付が初めから不可能であるような贈与を、中沢新一は「純粋贈与」と呼んでいる。この一方通行の贈与は、通常反対給付可能な贈与以上に、商品交換の原理と相容れず、ときには敵対する場合さえある。この一方的な贈与の原理と商品交換の原理の対立を Dickinson がはっきり意識していることを、この“Publication - is the Auction”で始まる詩は示している。

“Thought”すなわち詩は直接には“Mind of Man”すなわち頭脳の産物だが、根源的には“Creator”すなわち詩神の所有物であり、詩人に贈られたものであると、この詩では意識されている。贈物は市場に商品として出してはならない。この約束事に違う者は、魂の「汚れ」(“foul”)と「恥辱」(“Disgrace”)を招く。したがって、語り手は、創造主のものは創造主に返せと主張する。実際の表現は「あのお方に、高貴な調べを、ひとまとめに売り渡せ」(“Sell / The Royal Air - // In the Parcel -”)であるが、敵方(この場合は市場経済体制)の語彙を借用して自分の論理を組み上げるのは、Dickinson の常套手段であり、得意技である。しかしながら、実のところ、詩人は作品を創造主に返すことはできない。精々のところ、創造主に感謝の祈りを捧げるしかない。反対給付が不可能な贈物は、また別の誰かに贈るしかない。可能性としては、生前にも、死後にも贈ることができる。生前に友人知人に贈る場合、すなわち Erkkila が「女友達の共同体」と呼ぶ一種の“public sphere”に投じる場合、Dickinson の贈与は、共同体内での通常の贈与交換を活性化するだろう。

Erkkila はこの詩の分析に贈与論の観点をういていないが、その可能性にはおそらく気づいている。なぜなら、手紙や詩をやり取りする女友達の作る共同体について、明らかに贈与論を踏まえて、こう述べているからだ――

女たちが家庭において父の権威に服従し、結婚制度のなかで「法的に」庇護され、合衆国憲

法のもとで市民権と政治的存在を奪われていた時代に、ディキンソンの女たちとのやり取りは、古い社会における贈与（gift-giving）と同じ機能を果たしていたように見える。それは、制度化されざる形態の人的交流（social commerce）を生み出し、一方で人的交流が競争と敵対関係と張り合いの現場となるなかで、女たちの社会的存在および団結を肯定した。（*The Wicked Sisters* 19）

「創造主」に返礼できないことに起因する新たな贈与は、こうして女友達によって作られた文学空間内での詩や手紙のやりとりを誘発する。

一方、生前に Dickinson が詩や手紙をやりとりした人々は数えるほどだったが、彼女は死後に多くの読者を得た。明らかに Dickinson はそのことをかなりの自信を持って予期していた。自分の詩が未来への一方的な贈物となることを Dickinson は知っていた。そして、その贈与行為が、市場経済の商品交換の原理とは対立することも明確に意識していた。次に引用する詩によって、このことは明らかである――

Some - Work for Immortality -	ある人々は不滅のためにはたらく
The Chief part, for Time -	それより主だった人々は時間のためにはたらし
He - Compensates - immediately -	時間は直ちに報いる
The former - Checks - on Fame -	不滅は名声の小切手で報いる
Slow Gold - but Everlasting -	名声とは緩慢な黄金。でも永遠に続く。
The Bullion of Today -	今日の金塊
Contrasted with the Currency	とは対照的な不滅性の
Of Immortality -	通貨。
A Beggar - Here and There -	そここの乞食のまなざしの方が
Is gifted to discern	株式仲買人の洞察よりも
Beyond the Broker's insight -	先を見通すことができる
One's - Money - One's - the Mine -	ひとつはお金、ひとつは金鉱

(Fr 536 / J 406)

“Publication - is the Auction”で始まる詩と同じく、例によって、敵方である資本主義市場主義経済の用いる語彙（“Checks,” “Gold,” “Currency,” “Broker,” “Money”）を逆手にとって、自分の論理を構築している。時間は人々の働きに直ちに報いるというのは、商品としての労働と商

品としての貨幣が即時に交換されるという商品交換の原理に言及している。それに対して、「不滅」すなわち文学のために働く者に、文学は「名声の小切手」で、すなわち未来の名声を約束することによって報いる。いまは「乞食」にも等しい無名詩人は、その「小切手」が未来においてけって不渡りにならないことを「見通す」(“discern”)ことができる。さきに触れた貴族的な“discern”が、ここでも市場経済側の「株式仲買人の洞察」(“Broker’s insight”)と対置されている。Erkkilaは「ディキンソンは、『今日の金塊』たる貨幣、交換、そして自由に流通する現金を、『緩慢な黄金』、あるいは『不滅性の通貨』としての超越的な芸術作品と対置している」(*Historical Guide* 165)と述べているが、この「超越的な芸術作品」は、「贈与としての芸術作品」と読み替えることができる。「名声」(“Fame”)などという言葉正面切って口にされると、現代の読者は歯が浮くような感じを覚え、あるいは鼻持ちならない詩人と断じがちだが、生前の出版を諦めた Dickinson は、自分の詩を〈未来への贈与〉と覚悟し、後世の人々による〈お返し〉としての〈死後の名声〉のなかに生きようと決意した、と考えたい。

#### 引用文献

- Bennett, Paula Bernat. “‘The Negro never knew’: Emily Dickinson and Racial Typology in the Nineteenth Century.” *Legacy* Vol.19, No.1. Lincoln, NE: U of Nebraska P, 2002.
- Erkkila, Betsy. “Dickinson and the Art of Politics.” Ed. Vivian R. Pollak. *A Historical Guide to Emily Dickinson*. New York: Oxford UP, 2004.
- , “Emily Dickinson and Class.” *American Literary History* 4 (1992), 1-27.
- , *The Wicked Sisters: Women Poets, Literary History & Discord*. New York: Oxford UP, 1992.
- , *Whitman: The Political Poet*. New York: Oxford UP, 1989.
- Franklin, R. W. ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.
- Grabher, Gudrun, Roland Hagenbuchle, and Cristanne Miller eds. *The Emily Dickinson Handbook*. Amherst: U of Massachusetts P, 1998
- Johnson, Thomas H. ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1955.
- Murray, Aife. “Architecture of the Unseen.” Eds. Martha Nell Smith and Mary Loeffelholz. *A Companion to Emily Dickinson*. Malden, MA: Blackwell, 2008.